

キノの旅 —the  
Beautiful World—

ぴちかー党

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モトラド（空を飛ばないものを示す）のエルメス共に色々な国を旅するキノ。

今日はどんな国を訪れるのだろうか？

投稿予定

第1話：動物達の国（ボノボノ×キノの旅）

第2話：2人の旅人の話（刀語×キノの旅）

第3話：おかしな国（ボボボーボ・ボーボボ×キノの旅）

第4話：お菓子な国（焼きたてジャパン×キノの旅）

# 目次

動物達の国

---

1



## 動物達の国

相棒のモトラド（一般的に空を飛ばないものを示す）と共に旅するキノ、彼女達はある国を目指していた。

「キノ、本当に動物が言葉を話す国なんてあるのかな？ こういうちやなんだけど、にわか信用できないよ」

「エルメスだって喋っているんだから、動物が言葉を話す国があっても驚かないよ。」

「それに・・・」

「それに？」

「ここで、一旦何かを考えていたらしく話を中断させるキノ。中々返答が来ないことにもどかしくなったエルメスが催促するように言葉を放つ。

「それに、の次に何て言おうとしているの？ そこで止められるととっても気になるんだけど」

そこで、短く笑いエルメスにこう返す

「それに、陸のような例もあるしね」

「うへー」

キノが言う「陸」とは、以前コロシウム（原作1巻4話）で出会った剣士、シズが飼っているサモエド犬の事である。見た目は全身雪のように真っ白い毛並みに、いつも笑っているような表情、性格は大人しく飼い主にとっても従順な大型犬である。（何故かエルメスとは犬猿の仲）

「まさか、あの犬の話が出てくるとは思わなかったよ」

「ごめんよ、そういう反応になるだろうと思って言わないでおこうと思ったんだけど」

「思ってたけど？」

「エルメスが聞いてきたから、答えちゃったよ」

「うへー」

1人と1台がそんな、とりとめもない話を話ながら走っていると一匹の動物を目にする。

「動物が、2足歩行してる・・・」

「本当だ、とてもかわいいね。シマリスかな？」

エルメスの言葉にどこか、ピントのずれた返答をするキノ。

とりあえずキノ達は、自分の身長ほどのくるみを抱き抱えたシマリスと思われる2足歩行の動物に近ずき自己紹介を始める

「はじめまして」

「!!」

「僕はキノ、此方は相棒のエルメス」

「よろしくねシマリス?さん」

「・・・ぢめる」

何か言葉を発したようだが、断片的にしか聞き取れない。

再びシマリスから先程の言葉が、今度はキノにも聞き取れるくらいはっきりと発せられた。

「いちぢめる?いちぢめる?」

小首をかしげながら、そう問いかけるシマリス。

「あくあだからいつもいつてるじゃないかキノ。そんな、これ見よがしに見える位置にパースエイダー（銃器）を吊っていたら誤解されるって」

「きつと、それで撃たれて食べられちゃうと思ってるよ」

茶化すエルメスを適当にあしらい、再びシマリスに向き直るキノ。そして、先程と同じ自己紹介を行い、自分達は旅人でありこの近辺に国がある事を聞いてやって来たこと、そして出来ればそこで3日間滞在したいことを丁寧な口調で付け足した。

「フムフム、じゃあシマリスちゃん達がすんでいる集落に案内してあげるでいす」

「誤解が解けてよかったね」

「多分エルメスが余計なことを言わなければ、誤解は生まれなかったと思うんだけど」  
「まあまあ、発車オーライということにしようよ」

「もしかして、結果オーライ？」

「そうとも言うね」

「・・・」

そんなやり取りをしている間に視線をあげると先程までいたシマリスの姿が消えてしまっていた。さて、どうしたものか。先に行ってしまったのだろうか？等と考えていると、ふとジャケット右胸のポーチに妙に違和感がある事に気がつく。

キノが中を開け確認するとそこには、先程のシマリスが快適そうにくつろいでいた。

「そこは、弾が入っているからちよつと待っててね」

そういうと、一度シマリスをポーチから取り出しつつ手際よく中の弾を取り出す作業にかかる。捕まれているシマリスは小首をかしげながら不思議そうにキノを見つめあの言葉を呟く。

「いぢめる？いぢめる？」

「いぢめないよ・・・よし！これで大丈夫。さあどうぞ」

中の弾を全て取り出し再びポーチにシマリスをしまうキノ。1人と1台と1匹は目的の集落目指して、進み始める。険しい獣道を走り続けること約30分、家らしき建物



が集合する集落を漸く確認できたキノ一向。集落まであと、数百メートルと言うところ  
でどこか気の抜けた声が聞こえてくる。

「シマリスちゃんどこ行つたの。シーマーリーすちゃん」

「おーいシマリス」

声のする方に進むとこれまた言葉を話す2足歩行のアライグマとラッコに出会つた。

「うわーおーばーけー」

「逃げるぞボノボノ!!このままじゃ俺達食べられちゃうぞ」

「いーやーだー。食べないで」

キノを目にし、泣きじやくるボノボノ。今まで人間を見たことがない彼らにとつてこ  
の反応は当然といつてもよかつた。

さて、どうすれば刺激せずに誤解を解いてもらえるだろうか?そう考えているとふと  
胸ポーチから、どうやら彼らの声を聞いたシマリスが隙間から顔を覗かせ2人声をかけ  
ていた。

「ボノボノちゃん」

「あー!!シマリスちゃん。どこ行つてたの」

「心配したんだからシマリス」!

3匹が感動の再開をはたしたのもつかの間、シマリスが手際よく二匹に事情を説明し

てくれていた。シマリスのナイスアシストもあり、キノ達の目的を理解した彼らは目的地まで案内する。

何故か、キノのエルメスに乗り込む二匹。流石に一人用のモトラドに三人？乗りは厳しいところがあるが、あえてそこには突っ込まず集落を目指す一向。

「重い……」

「まあまあ、あとほんの少しだからがんばってねエルメス」

「……重い」

エルメスの10回目の重いを耳にし、集落にたどり着く一向。早速集落の長である長老に挨拶に向かい、そこで自己紹介兼3日間の滞在希望をつける。

快く長老の許可を得たキノ一行は早速歓迎の為の宴に招待された。当然ではあるが宴会出席者はキノを除き全員が動物であった。

スナドリネコにプレーリードック、はたまたシャチャやラッコ。極めつけにはオオサンショウウオまで。陸・海・空ほぼ全てに生息する動物達がこの集落に存在し人語を操るという本当に不思議な空間がそこには発生していた。

「なあ、他の国ってどんなところなんだ？教えてくれよ」

「僕もしりた〜い」

「シマリスちゃんも！シマリスちゃんも!!」

集落に動物以外が初めて訪れた事もあり、キノはボノボノやアライグマ君達はもとより、様々な動物たちから他国はどこなところなのかを訪ねられた。

宴会を開き、おまけに居住空間を提供してくれた彼らに、快く今まで訪れた国の話を伝える。

「そうですね、じゃあ恐らく訪れた国全部は話きれないと思いますが・・・」

そういうとキノは、訪れた幾つかの国の話を始める。

男と女性別ごとで全ての住人の顔が同じ国のお話(同じ顔の国)、どんな犯罪行為をしても罪には問われない国(人を殺すことができる国)、国自体が移動している国(迷惑な国)等々、外の世界を知らない彼らにとっては全てが新鮮であった。

「どうしたんだい？シマリスちゃん？」

宴もたけなわとなり始めたところで、キノとなりに腰をおろすシマリス。

そして、キノにこんなお願いをする。

「キノさん、シマリスちゃんも外の世界にいつてみたいの」

「うーん」

「ダメ？ダメ？」

「どうしようか、エルメス？」

「いいんじゃない？リス一匹だけならそんなに重量に変化はないし」

返答に困りエルメスに助けを求めるも、そうはぐらかされるキノ。見事にあてが外れてしまったキノは条件としてご家族の同意を得られればつれていくと行ってしまった。

「あんな、約束してよかったの？キノ」

「まあ、ああ言わないと引き下がりそうになかったしね」

「もし家族の同意を得られたらどうするのさ？」

「そのときは・・・」

「そのときは？」

「そのとき考えるよ。今日はもう寝る時間だおやすみエルメス。」

「さいですか。おやすみキノ」

こうして、1日目を終了した。

2日目は昨日同様、彼らに旅のはなしを行う。所持していた携帯食料を珍しげに見ていたので彼等におすそわけしてあげた。

「ま〜ず〜い〜よ〜」

「おいしくはないな」

「シマリスちゃんは結構好きでいす」

三者三様の反応を示しつつ、食を進める。そんな姿を微笑みながら見つめるキノ他の国では感じる事ができない、どこかゆったりとした時間。

そんな、不思議な空間を楽しみつつ2日目もあつという間に過ぎていった。

そして、最終日となった滞在3日目長老への挨拶も終わりエルメスに跨がるキノ。

そんな彼女達を見送るため、広場は大勢の動物達で賑わっていた。

「さよなら〜」

「元気でな〜」

口々にキノへ別れの言葉を告げる動物達。しかし、そのなかにシマリスの姿はなかった。

「以外だねきつといの一番に来ると思ったんだけどね」

「恐らく家族の同意が得られなかったんじゃないかな?」

近くにいた、ボノボノに尋ねると案の定予想通りの答えが帰ってきた。シマリス家族によると今は不貞腐れて自宅で寝ているのではないか?との事である。

「よかったねキノ。本当に許可得ていたらどうしようもなかったもんね」

「そのときは、一緒に旅をするのも悪くないと思っていただけね」

そう呟き、一人と一台は国を出国した。そして、出国から暫くエルメスを走らせているとき、ふとキノがある違和感に気付きエルメスを停車させる。

「どうしたのさ?キノ」

「ちよつとね・・・」

そういうと、おもむろにジャケットの右胸のポーチを確認し呟く

「やっぱり」

「何がやっぱりなのさ?」

エルメスにも見えるようにポーチ内を見せる。そこには、熟睡しているシマリスの姿があった。いつ侵入したのかは不明だが、恐らく家族と喧嘩別れたあとポーチに潜り込んだのであろう。これならば、あのとき姿を表さなかったのも納得がいく。

「・・・どうするのさ?」

「どうしよつか?」

エルメスの質問に質問で返すキノ。そうこうしているうちに、シマリスが目覚ます。そして、キノを見つめ首をかしげながらあの言葉を呟いた

「いちめめる? いぢめめる?」

「いちめめないよ」

そう言つてキノは優しく頭を撫でていた。

「シマリスちゃん、僕達はこれから旅に出るんだ。旅では当然危険なこともあるし、不便なこととも強いられる。」

「それに、3食の食事とベットに毎日ありつける保証もないしね」

「そういうわけだから出来れば、君には元の村に戻ってほしいんだ。勿論ちゃんと送り

届けるよ」

そう説得するもシマリスは頑なに首をたてには降らなかつた。

「大丈夫、シマリスちゃんこう見えてもとつても強い。きつと役に立つときが来ると思うのでいます」

「だって、どうするのさ？」

シマリスの説得成功の確率はどうかや低いようだ。無理矢理連れて帰る手もないわけではないが、恐らく抵抗し逃走を図るであろう。ここまで小さいと捕まえるには、一苦労だ。

「わかつたよシマリスちゃん。でもこれだけは覚えていてほしい。」

「さつきもいったけど、旅は本当に危険で不便なことも一杯あるんだ。どうしても耐えられないと思つたら直ぐに僕に言つてね。」

「そのときは、どんなの遠くにしようとも必ず君の国に送り届けるから」

その言葉に、握りこぶしに親指をたてて。了解のポーズを取るシマリス。

新たな仲間が加わり、一人と一台そして一匹の旅は続く